■ を訪れた。 ■ るタイミングに合わせて、同 ランからの留学生が帰省す

ができた。
ができた。
などを除けば、いたって普通の街とは違い、カードが使えないこととは違い、カードが使えないこととは違い、カードが使えないこと

く自然に感じられるのだ。同じ広に二度向きを変えさせることで、ごのずれが気になるはずだが、左右する。いきなり中庭に入ると、45度次に左へ45度まわって中庭に到達次に対が気になるはずだが、左右でスジッディ・シャーは、エントーマスジッディ・シャーは、エントー

収し、 には、 場にあるマスジッディ・ルトファッ 整している。 状をもち、そこで方向の感覚を調 の空間で軸線が回転されるのだ。 裕がない。その代わりに、ドーム は、敷地が狭いために、アプロー ムによるアル・ガディル・モスク 見学した。ジャハンギル・マズル る巧みなプランをもたらしている。 重なりあうことが、 モスクにおけ がポイントだ。 実際の都市空間 ている。 ラーも、外側の回廊をぐるりと時 しながら内接して上昇するいう形 積み重ねた正方形が45度ずつ回 チを長くして、 角度を修正する余 万向性と聖地への理念的な軸線が 計周りに歩くあいだに、 ズレを吸 テヘランでは、現代のモスクを メッカへの方角に修正され 礼拝の空間に到達するとき つまり、直接入れないこと

のコンクリートの正方形の壁が入逸だった。 スリットの入った大小ムズ・カーネン(1977年)は、秀ムズ・カーネン・ディバの手がけたア

ミニマルな空間である。 水でいる。スリットの隙間からは、 メッカの方角を示す柱が立つ。安 れている。スリットの隙間からは、 こつの正方形の角度がず といすが、二つの正方形の角度がず

ムの建築を生みだせるのだろう。♥いるからこそ、洗練されたイスラお形態操作は、過去にも現代にもな形態操作は、過去にも現代にもしても、軸線の回転という抽象的しても、軸線の回転という抽象的

イランの回転する軸線

@Isfahan



入れ子状に壁が続く アムズ・カーネン

を ちこち 散 :

五十嵐太郎

いがらし たろう

建築史家、東北大学准教授

